

## <国語科>

### 古典に親しみ、自己を見つめる生徒の育成

～ 兼好法師のものの見方・考え方を手掛かりに、自己の生き方につなぐ国語科指導 ～

可児市立蘇南中学校 教諭 加藤 祐輝

#### 概 要

本研究は、古典に親しみを感じにくい生徒の実態を踏まえ、兼好法師のものの見方・考え方を手掛かりとして、古典を自分事として捉え、自己の生き方を主体的に考える生徒の育成を目指した実践である。事前の意識調査および定期テストの分析から、生徒は古典を現代の生活と関連付けて捉えることができず、語句理解や文脈把握、筆者のものの見方・考え方を読み取る力に課題があることが明らかとなった。そこで、「徒然草」を教材とし、現代語訳や語注を手掛かりに作品を読み、兼好法師のものの見方・考え方を自分自身の考えと比較しながら理解を深める言語活動を設定した。単元のまとめでは、「生き方のヒントカード」を作成させ、文章との対話や仲間との対話を通して、言葉を根拠に自分の考えを形成・再構築する学習を展開した。その結果、生徒は主体的・対話的に学びを深め、古典への親しみを強めるとともに、学習で得た考えを日常生活に生かそうとする姿が見られた。以上より、本実践は研究仮説の妥当性を検証することができた。

#### 1 研究主題の設定にあたり

##### (1) 教育をめぐる現状と国語科の役割

###### —古典文学を学ぶ意義との関連—

教育をめぐる現状として、令和7年度全国学力・学習状況調査やOECDによるPIISA2022において、文章を正確に読み取る力に加え、根拠を基に考えを説明したり、複数の情報を関連付けて考えたりする言語能力に課題があることが指摘されている。また、情報化の進展により、断片的な情報を受け取る場面が増え、文脈を踏まえて深く考え、言葉で整理・表現する力の弱さが課題となっている。

こうした課題に対し、中央教育審議会の第3回国語ワーキンググループ（令和7年11月28日）では、「言語能力はすべての学習の基盤であり、国語科がその育成の中核を担う教科」であることを示した。また、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（※以降、「学習指導要領」と記載する。）では、国語科の目標として「言葉による見方・考え方を働かせ、思考力・判断力・表現力等を育成すること」を掲げ、言語活動の充実を重視しているように、現状の課題改善のために、国語科が担う役割は大きい。

古典文学においても、言語能力の育成を図ることができる。古典の学習は、「我が国の言語文化に親しみ、ものの見方・考え方を知る」（学習指導要領 第二学年 指導事項）ことを目的としている。古典に描かれた人間の生き方や価値観を、本

文を根拠に捉え、現代と比較して考える学習は、言語能力の向上と自己の生き方を考えることの双方につながる。このように、国語科は、古典の学習も含め、主体的に考え、言葉で表現する力を育成する教科として重要な役割を果たすといえる。

##### (2) 生徒の実態

先述した「教育をめぐる現状と国語科の役割」と、生徒の実態を踏まえ、どのような指導事項を扱い、どのような指導の手立てが効果的かを見いだす目的で、事前に二つの調査を行った。以下が、その調査内容と実態分析である。

#### 【調査1】 意識調査

【調査内容】 あなたは「古典に親しみ」を感じていますか。（親しみ＝古典を身近に感じること内容や言葉遣いのよさを感じる）

親しみを感じる。	どちらかといえば親しみを感じる。	どちらかといえば親しみを感しない。	親しみを感しない。
0%	14.8%	48.1%	37.1%

【2年生 27名実施】

意識調査の結果として、8割を超える生徒が古典に親しみを感じていないことが明らかとなった。生徒に理由を問うと、「古典とあまりかかわる機会がない。」という返答が多かった。この結果を分析すると、「古典を昔のものとして捉え、現代を生きる自分たちには関係のないものだ。」とする傾向があると考えられる。また、理由の中

には、「古典の内容を理解することが難しい。」という答えも多くあった。そこで、生徒が古典の何に難しさを感じ、つまずきが生じているのかを分析した。その結果を下記に記す。

### 【調査2】 令和7年度前期中間テストの結果から

令和7年度前期中間テストの「枕草子」における設問別の得点率を算出すると、次のような結果が得られた。

「枕草子」に関する問題	正答率	無解答率	誤答率
設問(1) 歴史的仮名遣いを問う問題	66.7%	0%	33.3%
設問(2) 原文と現代文を対応させる問題	51.8%	7.4%	40.8%
設問(3) 筆者のものの見方・考え方を問う問題	44.4%	18.5%	37.1%

設問(1)の結果から、古典に関する基本的な知識の定着に弱さがあることが分かった。そのため、本実践の導入で歴史的仮名遣いについての復習を行い、知識の定着を図ることにした。設問(2)の結果からは、言葉への着目の弱さがうかがえる。この点については、文脈をたどったり、言葉の意味を推測したりするなどして、原文と現代文を対応させる方法を身に付けさせ、正しい解釈へとつなげる手立てを講じた。一方、設問(3)については、無解答率の高さが目立った。この要因として、設問(1)(2)が関連しているほか、古典に表れる筆者のものの見方・考え方を捉えきれず、理解を諦めている生徒が多いと予想した。筆者のものの見方・考え方を理解したり、今を生きる自分たちとの共通点や相違点を見いだしたりすることが「親しみ」の第一歩となる。しかし、それができていないが故に、古典への親しみが感じられない生徒が多くなったと考えられる。そのため、本実践では、古典的文章においても、現代的文章と同じように言葉と向き合い、想像力や思考力を駆使し、仲間や教師、文章と対話しながら、言葉の力を身につけていく授業を目指した。

## 2 研究主題とその捉え

### (1) 研究主題

前述の「研究主題の設定にあたり」を踏まえ、本実践の研究主題を次のように設定した。

**古典に親しみ、自己を見つめる生徒の育成**  
～兼好法師のものの見方・考え方を手掛かりに、  
自己の生き方につなぐ国語科指導～

教育をめぐる現状を踏まえ、学習指導要領が示す「我が国の言語文化に親しみ、ものの見方・考え方を知る」という古典学習の意義に着目した。中でも「徒然草」に表された兼好法師のものの見方・考え方は、人の生き方や物事の捉え方について示唆に富み、生徒が現代の生活や自己の在り方と結び付けて考えることができる教材である。本実践では、兼好法師の考え方を手掛かりとして古典に親しむ学習を構想することで、古典を自分事として捉え、自己の生き方について主体的に考える生徒の育成を目指した。

また、本実践における「古典に親しむ」とは、古典作品の語句や文法を理解することにとどまらず、作品に描かれた人物の生き方や価値観、ものの見方を読み取り、理解しようとする態度をもつことであると定義する。

このように、古典を過去のものとして距離を置くのではなく、昔の人の考え方を自分事として捉え、自らの生き方を考える手掛かりとして活用することをねらい、研究主題を「古典に親しみ、自己を見つめる生徒の育成 ～兼好法師のものの見方・考え方を手掛かりに、自己の生き方につなぐ国語科指導～」とした。

### (2) 研究仮説

古典の学習において、兼好法師のものの見方・考え方を生徒自身の生活や価値観と関連付けながら読み解く言語活動を設定すれば、生徒は古典を自分事として捉えるようになり、古典に親しみ、自己を見つめる生徒を育成することができる。

## 3 本実践における単元の捉え

本実践では、「徒然草」を学習教材とし、学習指導要領第二学年の指導事項である【知識及び技能 (3) 我が国の言語文化に関する事項 イ】「現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知る」および【思考力、判断力、表現力等 C 読むこと (1) オ】「文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること」を身に付ける指導を行った。そのために、兼好法師のものの見方や考え方を、自分自身のものの見方・考え方と比較することで、見方・考え方を広げ深めたり、自分の生き方につなげたりすることをねらい、「兼好法師のものの見方・考え方から、生き方のヒントカードを作る」という言語活動を設定した。この言語活動を通し、身に付けたい資質・能力の定着を図るとともに、「古典に親しみ、自己を見つめる生徒の育成」に努めた。

教科書（光村図書）では、「徒然草」から、全244の章段の始まりである「序段」と、説話的な出来事に内在する人間の意識や、生活上の問題を述べた第52段「仁和寺にある法師」を取り上げている。本実践では、そこからさらに、兼好法師の人生観や世界観の理解を深め、古典に親しみをもたせるために、「全244段のうち、もっとも自分の生き方に生かしたい章段」を生徒自身に見つけさせ、取り上げさせた。「仁和寺にある法師」以外にも、生徒が共感する章段は多くある。「仁和寺にある法師」の学びから興味関心を広げ、自分の生き方の道しるべとなるような章段を見つけることは、古典に親しみをもつ生徒の育成に大いに関与すると考えた。

#### 4 研究内容と結果および考察

##### 研究内容1 生徒にとって学ぶ魅力・必然性があり、社会生活につながる力を育む言語活動や単元の構想

本実践では、生徒が学ぶ魅力を「自分自身の生活を豊かにすること」、学ぶ必然性を「自らの生き方につながる」として、言語活動の設定や単元の構想をおこなった。古典は今を生きる自分たちとは別次元のものであるという考えから脱却し、現代にも通じる考えがあることに気付かせ、古典を学ぶことが自分自身の生活をより豊かにする可能性であるものだということに魅力を感じさせたい。そのため、添付資料【図1】のように、兼好法師の人物像や、仁和寺にある法師に表れた兼好法師のものの見方・考え方を理解するという「読むこと領域（思考・判断・表現）」の指導と、古典に親しみを感じさせたり、言葉を手掛かりにして古典に表れたものの見方や考え方を知ったりする「伝統的な言語文化（知識・技能）」の指導を相互に関連させながら資質・能力を育成する単元構想表を作成した。



【図1 単元構想表】

##### 研究内容1の結果

「兼好法師のものの見方・考え方から、生き方のヒントカードを作る」という言語活動の成果物の一つが【図2】である。全生徒が、選択した章段から読み取った兼好法師のものの見方・考え方と、自分自身のものの見方・考え方を掛け合わせたうえで、「生き方のヒントカード」を作成することができた。この結果から、言語活動の設定および、言語活動に至るまでの単元の構想は、効果的であったといえる。

兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 自分が多くの人に尊敬される生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 余計なことは言わない生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 無駄に動かない生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 1日1日を大切に生きてやるべきことをやる生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 何でもやってみて、後から後悔のないように生きる生き方
兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 今を楽しむ生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント どんな事にも向き合おうとする生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 困ることがあったら場合に 応じて対応する切り捨て 捨てるか考える生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 何事にも諦めずやり切り、後悔のないような生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 速かに自分の大切なことに取り組む生き方
兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 自分自身は自分でやる生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 見ためより、中身を大事にする生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 残りの時間を大切に にする生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 一つ一つの行動を確かなるものにする生き方	兼好法師が教えてくれた。「私の生き方」のヒント 内容に自信を持つ

【図2 生徒が作成した「生き方のヒントカード」】

##### 研究内容1の考察

上記の成果が得られた要因は次の三点であると考察する。

一点目は単元の見通しを生徒と共有したことである。単元の出口となる言語活動をあらかじめ示したり、本実践で身に付けたい資質・能力を共有したりすることで、生徒は目的意識をもって各単位時間の学習に臨むことができた。

二点目は言語活動そのものの内容である。自己の生き方と関わらせる言語活動は、単に解釈のみに留まる単元の出口よりも、生徒の意欲を刺激し、主体的に学習に取り組む態度が見られた。このような効果が得られた背景には、やはり教科書教材の枠を超えた「章段の選択」にあると考える。全244章段の中には、社会生活にかかわることや、自然にかかわることも多くあるが、今回は「生徒の生き方に直接的に関わりそうな章段」を教師側が選択し、用意しておいたことが、言語活動を行ううえで効果的に働いたと考える。今回用いた章段は、下記の通りである。

- ・ 第35段 手のわろき人の
- ・ 第59段 大事を思ひ立たむ人
- ・ 第92段 ある人、弓射ることを習ふに
- ・ 第93段 牛を売る者
- ・ 第108段 寸陰惜しむ人
- ・ 第233段 よろづのところがあらじ

それぞれの章段が、「生を愛すること」「誠実な人間であること」など、多感な時期である生徒の心理に響くものになっている。

最後に三点目の要因として、単元構想を挙げる。先述したように、「読むこと領域」と「伝統的な言語文化」に関する指導を相互に関連させながら、資質・能力の育成を図ったことにより、生徒は円滑に学びを深められたと感じる。特に、第三時の手立ては有効であった。この時間では、古典文学の読解を、現代文における既習事項とつなげることに留意した。具体的には、「仁和寺にある法師のおもしろさ」の分析を、第二学年で学んだ「ヒューマノイド」における「伏線の役割」および「モアイは語る」における「論理の展開」を想起させながら授業を展開した。この学習により、生徒は

「文章」としての共通点を見だし、「古典文学」と「現代文学」の境目を無くした。以下が、第三時を終えた生徒の振り返りである。

古典の文章は、昔の言葉が使われていて、わかりにくいと感じていた。でも、今回の学びを通して、現代の文章と同じように、伏線が張られたり、自分の失敗を仲間に語る場面をいれることにより、話のおもしろさを強めるような構成の工夫をしたりしていることがわかった。古典の文章も、現代の文章と同じように、筆者の意図や工夫があることに気づき、読み取りがおもしろいと感じた。

## 研究内容2 生徒が「主体的・対話的で深い学び」を獲得するために

本実践の第5時において、主に「対話的な学び」に重点を置き、大きく二度の場面を設けた。

一度目は、「文章との対話」である。いにしえに書かれた文章との対話を通して、長い年月を経た筆者の思いを知り、筆者のものの見方や考え方に触れさせることをねらった。長い歴史の中で創造され、継承されてきた言語文化としての古典の作品に対し、そこに描かれ、表れている人々のものの見方や考え方をすることは、時代を超えて「人間」について考え、自分のものの見方・考え方だけでなく、今後の生き方について深く考えることにつながると考えた。

二度目の対話は、「仲間との対話」である。自分がなぜ、その章段に興味を抱いたのか、どの言葉、どの表現や文章構成から兼好法師のものの見方・考え方を見だし、自分の生き方につなげたのかを分析的にまとめたものを交流する。この対話を通し、古典への興味関心をさらに強めるとともに、ものの見方や考え方を広げたり、深めたりする機会とさせた。これらの対話を通し、「主体的・対話的で深い学び」の実現へとつなげる指導をおこなった。

## 研究内容2の結果

次に示す図が、「文章との対話」をおこなった生徒の記述である【図3】。

本生徒は、原文中に書かれた言葉や表現に着目し、兼好法師のものの見方・考え方を導き出している。「世間との付き合いを絶つ」ということを「兼好法師独自のものの見方・考え方」だと捉えているところに、本生徒の学びが見て取れる。このように、全ての生徒が「言葉や表現への着目→そこから読み取った兼好法師のものの見方・考え方→自分のものの見方・考え方との共通点や相違点」を、分析的に整理することができた。

【選んだ章段】  
第108段  
題名（寸陰惜しむ人）

【着目した言葉や表現/原文から】  
・内に思慮なく、外に世事なくして、止まる人は止み、修せむ人は修せよとなり。

(現代語部分)  
・つまらないことに心を遣わず、世間との付き合いを絶って真理を追求する志を遂げよ、というわけなのである。

【着目した言葉や表現から読み取った兼好法師のものの見方や考え方】  
・このことから、「世間との付き合いを絶つ」は普通の人では辿りつかない兼好法師独自の鋭い考えだと分かる。また真理を追求し、自分の道を極めるには、世間との付き合いを断つくらい心構えが必要だと分かる。

【自分の「ものの見方・考え方」との共通点や相違点(前書きしたもの参考に)】  
・自分は無駄な時間を過ごしてはいけないとは思っていたが、人生単位で考えたことはなく、一生を見据えて考えなくてはいけないと思わされた。

【図3】 「文章との対話」を視覚化

また、「仲間との対話」をおこなった際は、【図3】を用いながら、ペア交流をおこなうことで、自分と仲間のものの見方・考え方の差異に気づき、考えを再構築する姿が見られたり、他の章段への興味関心を広げたりする姿が見られた。このような姿が見られた要因については、考察にて記載する。

## 研究内容2の考察

【図3】のシートを作成するうえで、事前に生徒の実態を踏まえ、下記に記載する「予想されるつまずき」と「つまずきに対する手立て」を講じた。これにより、どの生徒にも「文章を根拠として考える力」や「書かれていることを基に自分の考えを形成する力」が身に付いたのだと考える。

### 【予想されるつまずき】

予想されるつまずきは、兼好法師のものの見方・考え方を正確に捉えることに難しさを感じるという点である。このような生徒の多くは、古典において苦手意識をもっており、語句の捉えや理解が未熟であると考えられる。

### 【手立て1】

具体を示し、考えをもつ際の拠り所とする。

(提示した具体例) 第92段より

私は、「懈怠の心、自ら知らずといへども、師これを知る。この戒め、万事にわたるべし。」という言葉に着目した。そこから、「怠ける心は、無意識のうちにある」という兼好法師のものの見方・考え方がわかった。このことから、私は「怠ける心に打ち克つ生き方」をしたいと考える。

## 【手立て2】

生徒が選んだ章段を事前に把握しておき、文章だけでなく、視覚的な資料を提示し、具体的な場面を想像しやすくする。また、補助資料【図4】を準備しておき、生徒が自分の意欲で自由に活用できるようにする。

兼好法師の「もの見方・考え方」が感じられる言葉・表現

第93段 | 牛を売る者

- 人間誰しも死ぬのがいやならば、だからこそ今ある命を愛するべきなのだ。命ながらえる喜びを、毎日大切に楽しまなくてはいけない。  
→ 「命を愛する」とはどういうことか。
- 愚かな人間はこの楽しみを知らず、物欲に振り回されてあくせくしている。命という宝を忘れて、やたらと快楽や金銭という別の宝ばかり追い求めていては、いつまでも心満たされることはない。そんなふうにして、生きている時に生きる喜びを楽しまないで、いざ死ぬ時になって死を恐れるならば、私の言う理屈とは合わない生き方をしていることになる。  
→ 兼好法師の見方。「愚かな人間」はどんなふうに住んでいるのか。  
→ 「心が満たされる生き方」とは何か。
- つまり、誰もが生きる喜びを楽しもうとしないのは、死を恐れないからだ。いや、死を恐れないからではなく、人間はいつも死と隣合わせに生きているという自覚がないからなのだ。  
→ 人間に足りない自覚とはなにか。  
→ 「生きる喜びを楽しむ」とはどういうことか。
- あるいはまた、それが生きるか死ぬかという次元にとらわれないで生きているというならば、それこそは人生の真理を悟っているといつてよい。  
→ 「生きるか死ぬかの次元にとらわれない」とはどういうことか。

【図4 補助資料 一問を立てることから読み取りを深める一】

【手立て1】において、事前に「思考の流れ」を示しておくことで、生徒自身も、自らの思考の流れを整理したり、考えをもつための道筋を理解したりすることができた。また、【手立て2】では、「問いを立てる」ことによる分析的な考え方を補助資料として用意した。この「問いを立てる」ことは、現代文学においても頻繁に扱っている思考法である。このような「読みの視点」も、現代文学となんら変わらないことを示唆することで、生徒の古典に対する苦手意識の緩和に努める意図もあった。つまりきを感じた生徒は、この補助資料を必要に応じて活用し、考えの足場としていた。

次に、「仲間との対話」について考察する。この対話は、以下の意図をもって二通りの対話を行った。

【対話Ⅰ】 同じ章段を選んだ者同士でペアを組み、交流する。

→ 交流相手がまとめたものとの共通点や相違点から、兼好法師のものの見方・考え方への理解を深める。

【対話Ⅱ】 違う章段を選んだ者同士でペアを組み、交流する。

→ 他の章段に表れる兼好法師のものの見方・考え方を理解し、興味関心を高めたり、考えを広げたりする。

【対話Ⅰ】においては、自分と他者とのものの見方・考え方を比較することで、同じ章段を選んでいたとしても、兼好法師のものの見方・考え方の捉え方の違いに気付くことで、一度まとめたことを再構築する姿が見られるなど、考えの深まり

が見られた。また、【交流Ⅱ】では、他の章段への理解を深めることにつながり、幅広い兼好法師のものの見方・考え方への興味関心をもつ姿を生み出した。この対話により、以下のような「考えを再構築」する生徒も見られた。

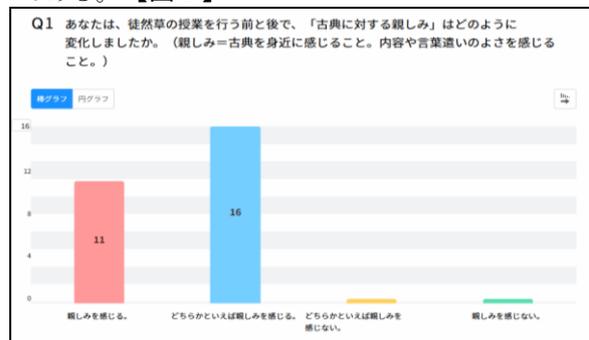
私は、第108段から、「今を大事にする生き方」を大切にしたいと考えていた。だけど、Aさんの「兼好法師は『一瞬』を大切にしている」という考えから、「今」ではなく、「一瞬」を大切にしたいと考え直すことができました。

## 研究内容3 生徒自身が単位時間や単元での自己の高まりを実感することができる指導・評価の工夫

単元の学びを通して、事前に行った「古典に親しみがあるか」という意識調査を再度行うことで、古典に対する意識の変容を自覚させたいと考えた。また、「学びを生活に生かす」ことを文章化させることで、学びを自分事にするとともに、生きてはたらく言語能力としての確かな定着を図った。評価については、単位時間における評価を「指導に生かす評価」なのか、「記録に残す評価」なのかを明確にして、単元構想図に位置付けた。

## 研究内容3の結果

単元の終末における意識調査の結果が次の通りである。【図5】



【図5 古典に対する親しみの変化】

単元の導入前は古典に親しみを感じていない生徒が8割を超えていたが、終末では古典に親しみを感ずる（親しみを感ずる、どちらかといえば親しみを感ずる）生徒が100%となった。以下が、生徒がそのように感じた理由である。

授業を通して前までは昔のことだし関係ないだろうと思っていたけど、話の意味とか考え方を知っていくと、意外と今の自分達にも関係あるし、これから学んだことを生活に活かしていこうと思ったから。

学習する前は、古典はなんなのかわからないところが多く、親しみをあまり感じなかったけれど、この単元を通して古典ならではの考えや表現などがあったり少し興味が湧き古典に親しみを少しもつようになったから。

また、「学びを日常に生かす」ことにつなげた生徒の記述を示す。本生徒は、兼好法師のものの見方・考え方から学んだ生き方のヒントとして、「自分の意志を貫き、そのために時間を使う生き方」（第108段より）を掲げた。

私は今、勉強を頑張りたい、という意味がある。しかし様々な誘惑が周りにはあり、誘惑に負け自分の意志が弱まってしまうことがある。兼好法師は、一生は短い、時間を大切にしろ、と考えている。無駄な誘惑に時間を使っても人生に生かされることは少ししかない。それなら、兼好法師の見方・考え方をヒントとして、「自分の意志を貫き、そのために時間を使う生き方」をしたい。「勉強を頑張りたい」という意志を貫き、日常の中で、勉強を最優先に取り組んでいきたい。

これらの結果から、単元を通し、本実践の目的であった「古典に親しみ、自己を見つめる生徒の育成」を果たせたといえる。

### 研究内容3の考察

上記のような結果が得られた要因は、「古典は昔のもの」「現代を生きる私たちとは縁遠いもの」という、生徒に根付いた考えを払拭するための、これまでの手立て全てが有効に働いたからだといえる。古典の文章にも、現代の文章同様、言葉や表現に、書き手の息遣いが感じられること、そして、ものの見方・考え方が現代にも通ずるといった知識を得たからこそ、研究仮説の正当性が立証されたのだと考える。

また、身に付けたい資質・能力を明らかにすることや、そのための一単位時間の明確な位置付けを意識した単元の構想を練ることで、生徒一人一人に確実に学びを蓄積させることができたことが、「自己の高まりの実感」へとつながった。国語科が担う役割に則した、「言葉に着目し、言葉で表現する確かな言語能力の育成」に寄与した実践となったと考える。

### 5 研究のまとめ

○ 生徒の実態分析を丁寧に行い、つまずきを想定し、考えをもつための思考の流れ理解させたり、問いを立てながら読み取らせたりすること

で、どの子にも生きてはたらく言語能力を身に付けさせることができた。

- 生徒にとって必然があり、魅力的な言語活動を設定することで、古典文学においても読み取ったことを自分事として捉え、主体的に考えをもつことができた。
- 知識・技能領域と思考・判断・表現領域を相互に関連させた単元構想表を作成することで、意図ある指導、意図ある学びにつながり、単元終末の言語活動へと円滑に結び付けることができた。
- 対話的な学びの場面を明確にすることで、生徒自らが考えを広げたり、深めたりするなど主体的に行い、「考えの再構築」を進んで行うことができた。
- 「つまずきに対する手立て」に対し、「得意を伸ばす手立て」の設定に弱さが見られた。「自分が選んだ章段のみでなく、他の章段における兼好法師のものの見方・考え方を理解し、自分の見方・考え方との共通点や相違点を見いだせる生徒」等にも有効な手立てを考える必要がある。
- 「古典に親しむ」生徒の育成は果たせたが、今後は歴史的な背景を捉えた上で、作品の世界をより広く、深く理解することができるようにしていき、伝統や文化を継承・発展させようとする態度の育成に努めなければならない。そのため、社会科教員と連携を図るなど、教科等横断的な学びの実現に努めたい。

### 6 参考資料

- ・ 中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 国語編 文部科学省（2018 東洋館出版）
- ・ 国立教育政策研究所 OECD生徒の学習到達度調査 (<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa>)
- ・ 文部化科学省中央教育審議会教育課程部会国語ワーキンググループ（第3回）配付資料 ([https://www.mext.go.jp/content/20251128-mxt\\_kyoiku02-000046000\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20251128-mxt_kyoiku02-000046000_3.pdf))